

南都本『平家物語』第九、及び、

延慶本『平家物語』第四をめぐる (五)

橋口晋作

五 ^(注一) 源平盛衰記

①「廿四日四宮踐祚事」の「花洛鎮西ニ二ノ御門出来給ヒキ世ノ末ニナレハカ、ル事モアリケリト不思議ナリシ事共ナリ」の表現は源平盛衰記の「代の末なればや京田舎に二人の國王出来給へりふしき成とぞ申ける」に近い。猶、長門本（延慶本も）に「世のすゑになれはかゝる事もありけり」という表現が見られるので、先の南都本の文は源平盛衰記と長門本（延慶本）を適当に撚り合わせながら成っているように見える。

②「平家鎮西内没落事」の「原田ノ大郎種直モ山賀ノ兵藤次秀遠ヲ憑テ山賀ノ城ヘ入セ給フヘキ由聞ヘケレハ年来ノ同僚ノ下手ニ成テ見アケン事モ心ウシトテ種直モコ、ヨリ心替リシテケリ」も源平盛衰記の「原田大夫種直も山鹿城へいらせ給にければ秀遠下知にあひしたかはん事しそんにつたへて心うしとおもひ即是も心かはりしてけり」に近い。猶、源平闘諍録に「年來ノ同僚始見上事」という表現が見られるので、先の南都本の文は、ここでは源平盛衰記と源平闘諍録を適当に撚り合わせて成っているように見える。

③「幡磨國室山行家与平家合戦事」の「美作國ノ住人恵比入道守信幡磨國ノ佐用黨同國ノ在廳利季兼知等」の働きを共に記すのは源平盛衰記だけである。南都本はこの戦いを恵比入道等の寝返りが全てを決したとして描き、彼等の動きに詳しい。この章段の前の方、行家が平家追討の為に駆り具したという「幡磨美作」の兵共とは恵比入道等を意識しての表現に違いなく、後の「彼幡磨美作ノ輩ハイミシク返忠シタリケリ共」以下も又恵比入道等の後日の様子なのである。これに対して源平盛衰記は「こゝに美作國住人恵比入道守信幡國住人佐用黨利季兼知を始として七百よき西の山のはなより時を作りてかけければけんし三方よりをしかこまれて軍忽にやふれてひかしをさして落行けり」という文があるだけで、外に関連する記事は見当たらない。恵比入道等の所属も明らかではないし、源平盛衰記では必ずしも寝返りということではなさそうである。しかも、囲みからの脱出後の最後の合戦ということであり、行家軍が「七八十騎に過」^(注二) なかったのではその功は南都本の場合に及ぶべくもない。ところで源平盛衰記のこの戦いだが、筆者はこの戦いの設定に疑問を感じている。この脱出行は、対第三陣以後「散々にたゝかひ」等と記されているので、激しい戦いの連続だったことは確かであろう。それを、四陣、三陣、二陣、一陣という明らかな方向をもって行家軍は戦っていたのである。ところが、この最後の戦いにはどうした訳か行家軍の進む方向が全く記されていない。これは物語として見た場合、作品のもつ流れを全く無視した設定で、明らかな失敗であ

る。このようなことがどうして起こったのか。理由は源平盛衰記が一枚岩の物語でなかった処に求める外あるまい。源平盛衰記の編著者は恵比入道等の働きについての伝承を知って、律儀にそれを従来の室山の戦いの中に納めようと計ったのであろう。さて、南都本との関係だが、異なる筋になっているので、話としては兄弟の関係として置くのが穏当であろう。但し、破綻を見せる源平盛衰記に対し、南都本は甘く整えられているので、その完成度に着目すれば、源平盛衰記は草稿譚（混態を見せながら）、南都本はその一方で整理された譚と見做すことが出来そうである。鴨長明は『発心集』で「二度ヒ問ニ便ヨリ死キヲハ」と記しているが、南都本は「二度ヒ問」等して編著された完成本なのかもしれない。

④「同十九日法住寺殿合戦事」の「道ヲ過ル者モ安カラス奪トラレハキトラレテアサマシナントモ云計リナシ」は長門本（延慶本）の「みちをすくものやすき事なし衣裳をはきとりければ」「源平盛衰記の「道をとる者も衣裳をはかれ手にもちかたになへる物をもをさへとりければやすき心もなしあさましなどはいふはかりなし」や屋代本などの「持通ル物ヲ奪取り衣裳ヲ剥トル」を撚り合わせたような表現である。「奪トラレハキトラレテ」という表現などは、これらの文（特に屋代本など）から目的語を省略して成ったもので、原初的な表現ではあるまい。

⑤同じ章段で、法住寺殿の戦いに勝った義仲が翌日、「悦申ノ時」を揚げたところ「京中ノ貴賤」「又イカナル事ノ出来ヌルヤ覽」と

怯えたという、右の引用の一文が源平盛衰記に殆んど一致している。

⑥「木曾語平家事」の「大臣殿ヨリ始メテ人々興ニ入テ咲ヒ勇ミアヘリ」は、長門本（延慶本）の「大臣殿よりはしめたてまつりて人々興に入てそ申されける」と源平盛衰記の「けうに入てそわらひいさみ給へる」を撚り合わせたような表現である。

六 屋代本（屋代本を含む語り本群も）

①「平家鎮西内没落事」の「國ヲアツケン庄ヲトラセント云」は屋代本・小城本・百二十句本・中院本・八坂本などにあり、それらから取り込んだものであろう。このような語彙に変化のある対句は⑦等にも見られるので、南都本編著者の一つの好みだったのかもしれない。

②「木曾振舞事」の「猫間殿トハ猶エイハテ」という説明は屋代本覚一本等殆んどの語り本（両足院本にはない）にあり、それから取り込んだものであろう。読者の注意を喚起して、面白がらせる語句で、〈語り〉の場を彷彿とさせる表現である。

③「同十一月備中國水嶋合戦事」の「源平ノ船ヲ押合セテヲメキサケンテ責戦フ」は、覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・小城本・百二十句本の「源氏^平両方時つくり矢合して互に舟ともおしあはせてせめた、かふ」（覚一本）に屋代本・東寺執行本・中院本の「喚叫テ」（屋代本）が撚り合わされているように見える。

④「同十九日法住寺殿合戦事」で、「近江美濃尾張」「甲斐ナキ命

ヲ生ントテ」「残ル六手ハ条里少路ヨリ」はそれぞれ長門本の「近江美濃」「いのちをたすからんため」「残六手は各居たる家小路ヨリ」の表現をもとに屋代本・小城本・百二十句本（他の語り本はそれぞれにどれかを欠く）の「尾張」「無甲斐」「条理」（屋代本）の語句を撚り合わせて成ったものかと思われる。

⑤同じ章段の「其時ノ主上ト申スハ後鳥羽院ノ四歳ニナラセ給ケルカ未タ御元服モ無リケルヲ内ハイツモ童躰ニテ御座マスソト思ヘリケリ又其時ノ院ト申スハ後白河ノ法皇ニテマシ／＼ケリサレハ院ハ必法師ニテマシ／＼マスト意得テカク申ケルソ不思議ナルオカシカリケル事共也」という解説は屋代本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本・覚一本の「法皇ヲ見進セテハ院ト申セハ法師ト心得内ノヲサナク坐々テ御元服モ無リケルヲ見進ラセテハ内ト申サハ童ト心得タリケルソ浅猿キ」（屋代本）といった文章を具体的にしながら書き改めたものではないかと思われる。

⑥「廿九日朝方以下四十九人解官事」の「目ナ見セソトアヒシライナセト」も屋代本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・小城本・百二十句本・覚一本のうちから取り込んだものと思われる。

⑦「木曾語平家事」との「平家ハ西國ヨリ責上ル関東ヨリハ討手向フト聞ユ」は、長門本・延慶本・源平盛衰記の「平家又西國よりせめのほる」（長門本）と屋代本・小城本・百二十句本の「木曾爲追討東國ヨリ既ニ討手ノ上ルト聞シカハ」（屋代本）とを結び付けて成ったものと見られる。

七 覚一本（覚一本を含む語り本群も）

①「十六日於院殿上除目被行事」で義仲・行家等と共に任官した源氏の数を「十余人」とするのは覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・東寺執行本・両足院本といった諸本であり、南都本はこれらから取り込んだのであろう。

②「木曾振舞事」の「ヤレ牛コンテイ／＼ト云ケレハ猶ヤレト云ト心得テ五六町コソアカ、セタレハ」「ソレニムスト取付テアワレ支度ヤ」も覚一本・鎌倉本の「やれ子牛こていやれこうしこていといひければ車をやれといふと心えて五六町こそあか、せたれ」「手かたにむすととりつゐてあはれ支度ヤ」（覚一本）から取り込んだものと見られる。

③「木曾与瀬尾合戦事」には岡山大学本と覚一本・鎌倉本とを撚り合わせたような表現が所々に見られる。即ち、「廣サ弓杖二杖ハカリナリ遠サハ西國一里」は岡山大学本の「ひろさ二ではかり也とをさは一里」と覚一本・鎌倉本の「はたはり弓杖一たけはかりにてとをさは西國一里」（覚一本）とを、「瀬尾太郎ハ高屋倉ニ上テ御儲ケニハ」も岡山大学本の「せのおの太郎御まうけには」と覚一本・鎌倉本の「妹尾太郎矢倉に立出て」（覚一本）を、「各カリ武者ナリケレハ責落サレテ」も岡山大学本の「かりむしや共なれはおちうせぬ」と覚一本の「かり武者とも皆せめおとされて」（鎌倉本は表現が異なる）とを、「前二河ヲアテカイタテカキテ」も岡山大学

本の「まへに川をあて、」と覚一本・鎌倉本の「はたにかいたてかいて」（覚一本）とを、それぞれ適当に撚り合わせて成ったものに違いない。又、「深田」の深さ「クサワキムナカイツクシフト腹ナントニハ過サリケリ」瀬尾が倉満を討つ所の「倉満ハ無水練ナリ瀬尾究竟ノ水練ノ達者ナリケレハ水ノ底ニテ取テオサヘ」瀬尾が思い返して郎等に語る言葉「命生テ参タリトテ同僚共ノ」小太郎の様子「小太郎ハ足カンハカリハレテフシタリ」小太郎の言葉「兼親故ニ御命ヲステサセ給ハン事五逆罪ニ候ヘハ」瀬尾探索隊の姿「敵五十騎ハカリニテ追懸ケタリ」兼康が小太郎を切る所「先我子ノ頸ヲ打落シ」等は覚一本・鎌倉本の該当の箇所から取り込んだものと見られる。

④「幡磨國室山行家与平家合戦事」の「十郎藏人ニ押並テ組ント云者ナカリケリ」「河内國長野ノ館ニ引籠ル」も覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本の「十郎藏人にをしならへてくむ武者一騎もなかりけり」「河内へうちこえて長野城にひこもる」（覚一本）から取り込んだものと見られる。

⑤「同十九日法住寺殿合戦」の「木曾院ノ御気色アシク成ト聞ヘシカハ」「御涙セキアヘスソ見ヘサセ給ケル」も覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本の該当の箇所から取り込んだものと見られる。又、南都本は「法住寺殿合戦」で討たれた者を途中に纏めているが（近江ノ前司為清）はここだけ、そのうち「寺ノ長吏法親王山ノ座主大僧正モ流矢ニ當リテ命ヲ失給ヘリ」は詳述部の「寺ノ長吏八条ノ宮

モシヤ遁レ給フトテ或小家へ逃入給タリケルヲ兵共追懸奉リ打臥ラレテ御頸トラレ給ヌ」と矛盾している。このような矛盾が生じたのは詳述部が非当道系本に由来するのに対し、再記して纏めた所が語り本の前述の諸本の「武士ともさむく」に射たてまつる明雲大僧正圓慶法親王も御馬よりゐおとされて御頸とられさせ給ひけり」（覚一本）をもとにしていることに原因するのではないかと思われる。

八 中院本・東寺執行本

①「廿四日四宮踐祚事」の冒頭「都ニハ四宮御位ニ付セ給ヒケリ」高維仁の位争い中の「只相撲フハカリハ無念ナリトテ十番ノ競馬アリケルニ」「夢想ノ告アリトテ申請ケテ出タリケリ」「名寅ツト寄テ吉雄ヲ取テ捧テ」に類似する表現を全てそなえているのは中院本・東寺執行本である。冒頭の「都ニハ」と場面を切り換える語句は覚本以外の全ての語り本にあり、おそらく屋代本あたりから取り込んだものであろう。

②「九國二嶋背平家事」の「一院ノ仰ナリ」「シツカオタマキニ針ヲツケテトラセタリケレハ」「彼岩屋ノクチニタ、スミテ」「フシタケニ丈ハカリナル大蛇」「カラ人ニ勝レタリ」は東寺執行本に一致する。猶、中院本・八坂本も「二丈」がもっと長くなっているが、その外は変わらない。

③「木曾振舞事」の「是ワ殿ノハカラヒカワ牛コンテイカ支度カ」は中院本・東寺執行本・両足院本の「これは八嶋のおほい殿の御は

からひかわこんでいがしたくか」(中院本)に近い。これも先に指摘した、語彙に変化のある対句のような表現(ただし、覚一本・屋代本等も「はからひか」「やうか」と変化している)なので、南都本編著者の好みであろう。

④「同十九日法住寺殿合戦事」の「四天王書テ四方ニソ押タリケル」という表現で、「四方」という語をもつのは中院本・東寺執行本・八坂本である。著者はこの「四方」は「胃」の誤写に端を発したのではないかと見ているのであるが。

九 両足院本

①「木曾振舞事」の「前ヨリハオリスシテ後ロヨリオリントス」は両足院本に一致する。この「前ヨリハオリスシテ」という表現は、読者の注意を喚起する説明であり、南都本編著者が滑稽な場面よく使う手法である。

②「木曾与瀬尾合戦事」の「自今以後君ノ御合戦モ候共マツサキニカケテ討死仕リ候ヘシ」は両足院本の「自今以後御合戦候ハ々真先懸御方トシテ討死仕候ヘシ」が最も近い。

③「同十九日法住寺殿合戦事」の「マツサキ懸テ死シントコソ思ツルニ」も両足院本の「真先懸テ討死セントコソ思シニ」が最も近い。

十 八坂本

「頼朝可為征夷將軍御使事」の「院宣袋ヲ羅箱ニ入テ奉ル」「平

家頼朝カ命ニ恐テ都ヲ落ツ」は八坂本の「院宣袋卵箱に入て出されたり」(東寺執行本も殆んど同文)「平家頼朝カ命に恐て都をおちぬる」に極めて近い。

(注一) 前稿「南都本『平家物語』第九、及び、延慶本『平家物語』第四をめぐって (四)」(『人文』昭和六十二年六月)で、岡山大学本の番号を誤って「三」(重複)としていたので、訂正したい。

(注二) 前稿「南都本『平家物語』第九、及び、延慶本『平家物語』第四をめぐって (二)」(『人文』昭和六十年六月)のこの章段を扱ったところで、「囲みからの脱出行での最後の第一陣との戦い」と記したが、一陣を駆け散らして出て見たら七、八十騎になっていたとあるので、これも訂正して置きたい。

(完)

〈付記 Ⅰ〉

南都本独自の表現、内容と見られるものを、〈付記〉として、章段毎に掲出しておく。

1 「十六日於院殿上除目被行事」では、前稿(一)で、転変する世を詠じた歌の贈答が挿入されていることと除目の執行者に頭の弁兼光が加えられていることを指摘した。外に、「官途ヲナサレシニ」「昨日ニ替ル有様ヲ」という表現も他本には見られない。

2 「十七日平家付筑前國事」でも、同稿で、貞能が中心になってい

ることと和歌の第二句とを指摘した。外に、「モテナシ奉テ」「天神千哀レトヤ思食ス覽ト」という表現も他本には見られない。

3 「二十四日四宮踐祚事」でも、同稿で、使者の名を藤内瀧口維重と明記すること、文徳天皇の崩御（を勝負が付いた後に記し）から清和天皇の即位へと続けることや、諱を記さず「四ノ宮」で通していることを指摘した。外に、摂政が「殿上人仰ラレナントシ」たこと、「此上ハ左右ニ及ハス」と四の宮をまず春宮にしたこと、「花洛鎮西」に二人の天皇が並んだ原因を「世ノ乱」と表現すること、天武天皇が大友皇子を破った場所を「美濃國風破ノ関」と明記すること、天武天皇・考謙天皇の話を「先例如此シ」と受けることなどがある。猶、文徳天皇が第一の皇子、第四の皇子のいずれとも決めかねた事情、那寅・吉雄の紹介や第一の皇子の後日には他本に見られない表現の仕方が目に行く。

4 「九國二嶋背平家事」では、同稿で指摘したように、伊能の先祖、大太の伝説を中心に独自の表現、内容が多い。伝説中では「柏原ノオウト」が男を尋ねて岩屋に辿り着いた所から後に顕著だが、この伝説の前後の「父母ハカリイツキカシツキテ住セケル」「九國二嶋ニハオチ恐レヌ者ソナカリケル」も他本には見られない表現である。

5 「平家鎮西内没落事」でも、同稿で指摘したように、平家が箱崎に辿りついてから章段末にかけて独自の表現、内容が多い。外に、使者を伊久とすること（同稿で指摘）、「クセハウタルニ異名ニヤ」とすることも他本には見られない。

6 「頼朝可為征夷將軍御使事」でも、同稿で、冒頭の「八月廿日都ニハ」の表現を指摘した。外に、八幡の若宮へ向かったところに独自の表現、内容が少し目に付く。

7 「平家自九國渡四國事」では、前稿(二)で、山賀落ちからこの章段を始める点、清経と北の方の逸話の表現、内容や重能が備前・備中・備後を討ち取ろうとしたということを指摘した。外に、「今ハ只重能計ソ時メキケル」「草ムラコトニ恨ル虫ノ音ハ日々ニ随テヨハリ行松ヲ掃フ風ノ音キクニモイト、哀ソマサリケル惣シテ折ニフレ時ニ随テ心ヲクタクキ涙ヲ催サスト云事ナシ」「船ヲ少シ漕ノケテ月ヲ見給ヒケレハ遙ノ浪間ヨリ幽ニ聞ヘケレハ」「ト讀給タリケルニコソ人タイト、袖ヲシホラレケル」「各涙ニ咽ヒ給フ哀ナツシ事共ナリ」という表現も他本には見られない。

8 「三種神器返納御使事」では「兎角ノ御返事ニモ及ハテ」という表現が他本には見られない。

9 「木曾振舞事」では、前稿(二)で、「未タ朝タトウノ事ナリケレハ」という設定を指摘した。外に、「院参ニハ具セラレタリ」の表現も他本には見られない。

10 「同十一月備中國水嶋合戦事」では義清、行広の戦死の前後に独自の表現・内容が多い。外に、「弥大勢ニナリ」「中ニ取籠メテイカニモシテ」という表現も他本には見られない。

11 「木曾与瀬尾合戦事」では、前稿(二)で、兼康が「奉公仕ルヘキ由」を申して同行を許されたとすること、船板で兼康が申し出たとする

こと、倉満の弟が討たれたという設定がないこと、代官が「田夫野人ノスカヲシテ只一人走り上」ったとしていること、兼康・小太郎が相手を労りながら死ぬ場面を指摘した。外に、「何事カハアルヘキサラハ下セトテ暇ヲ賜テソ下サレケル」「暇ヲエタルヲ悦テ夜ヲ日ニ継テ馳下ル」「是ヲ見テ安カラヌ事ニ思ヒ」「城ノ中ノ兵共ウツホ矢ノ五六タカシツコ矢ノ七八アリケルマテワコラヘタリケルカ」「頸ヲハ川ニナケ入テ」といった表現も他本には見られない。

12 「幡磨國室山行家与平家合戦事」でも、同稿で、「幡磨美作并遠江三ヶ國」の軍兵が特記されていることを指摘した。外に、行家軍が平家の陣へ突っ込んで行き、遂に敗れる室山の戦いには独自の内容・表現が多い。

13 「同十九日法住寺殿合戦事」でも、前稿(三)で、知康が「昔ハ宣旨ヲ」云々の言葉を味方への説明として述べていること、対句的表現がとられていること、「敵味方ヲ分テハ」云々の表現に改められていること、全体に記事の前後が著しいこと等を指摘した。外に、「心ウク悲キ事限リナカリケリ」「イヒヤリタル方ナクテ」「人民ノ歎キ悲事限リナシ」「義仲院宣ニモ随ハス奇怪ナリ」「武士ノ習ナリ」「ワナ泣く河ヨリ西ヘ御座シケルニ」「摂政殿モ南都ヲ指テ趣ムカセ給フト聞ユ平家都ヲ落シ事ヲコソ或ハ喜シキ事ニ思ヒ或ハオカシキ事ト人思ヘリシニ今コソ身ノ上ニ思知レテケレサレハ孔子ノ詞ニモ人ノ愁ヲ見テハ己レカ歎トシテ努々嘲ル事ナカレト云ヘリ此言誠カナ」「此事ハ昔奥州十二年ノ合戦ノ時頼義朝臣衣河ノ館ヲ討

落シテ賊首ヲ取懸双テ悦ノ時ヲ作タリケル吉例トソ申ケル」「肝魂ヲ失テ迷ヒ合ヘリ」「君ノ御有様オホツカナク思ヒ参ラセケレハ」「御前ニハ宗長ノ少将ハカリソ候ヒ給ケル」「源氏ノ撰録ト云事未タナシ其上物知ラテハ叶ヌ事ナリ」という表現、討たれた者を再度纏めて示すこと、「赤サイテ」の歌の解説も他本には見られない。又、義仲が主上や院の事情を知らなかったことを述べる部分には独自の表現が多い。

14 「廿一日攝録得替事」でも、同稿で、「不思議ナリシ事共也」が加えられていることを指摘した。

15 「廿九日朝方以下四十九人解官事」では、「太々然ルヘカラス」「今ヨリ後モヨカルマシ」「院ニモ召仕ハレサリケリ」という表現が他本には見られない。

16 「木曾語平家事」では「義仲此由聞キ其事思ヒヨラスト云ケレハサテ止ニケリ」という表現が他本には見られない。

17 「同十二月十日六条殿御幸事」では、前稿(三)で、義仲を諫めた人物を修範とすることを指摘した。

18 「十三日木曾除目執行事」では「浅猿シカリシ事共ナリ矣」という表現が他本には見られない。

〈付記 Ⅱ〉

前稿(一)から(四)までで、南都本に関するものの訂正や補いを章段毎に次に纏めて置く。

1 「寿永二年八月五日春宮定事」。前稿(二)末に「補訂」したが、その「補訂」中、「後白河法皇が三の宮、四の宮に引き続いて会うところを対句的表現で始める」ということは、屋代本や覚一本でもそっくりの構文で始めているので(語り本系の表現とは言えても)、南都本独自の表現ではない。

2 「同六日平家一類解官事」。前稿(四)の二長門本①で指摘した、長門本の言い換えの所二箇所は共に源平盛衰記に極めて近い。従って、この章段は長門本と源平盛衰記を撚り合わせたような表現になっているという方がよりの確である。

3 「十六日於院殿上除目被行事」。前稿(一)のこの章段を扱ったところで、「『或ハ……或ハ……』といった対照的表現を用いている」ということを他本にない点として挙げたが、岡山大学本に「あるひはしゆりやうになさるゝもありあるひは使のせんしをかうふるもありゆき系のせう兵衛尉になるもあり」という類似の構文が見られる。

4 「十七日平家付筑前國事」。前稿(二)でここを扱った時「安樂寺で詩を作り歌を詠じたというのは、源平盛衰記に一致する」と見たが、ここは前稿(四)の三源平闘諍録①で訂正したように岡山大学本がもつと近い。ただしこの章段では岡山大学本が南都本を資料としているように考えられる(拙稿「岡山大学蔵小野文庫本『平家物語』巻第八に就いて」『鹿児島県立短期大学紀要』昭和六十二年一二月)ので、源平盛衰記に覚一本が撚り合わされて、岡山大学本のような表現になっていると見るべきなのかもしれない。

5 「二十四日四宮踐祚事」。前稿(一)のこの章段を扱ったところで、「『昔モ加様ノ様シアリケリ』という独自の文を導入と」していると指摘したが、同じ前置きが中院本・八坂本にもある。又、前稿(四)の三源平闘諍録②で「孝謙女帝の還俗の例以下は延慶本が最も近い」と注記したが、特にどの本に近いとは言えない様相である。同稿の三岡山大学本①で、南都本・岡山大学本間だけに見られる表現の一致点として二箇所を挙げたが、以下の理由からそれを撤回したい。まず、「十番ノ競馬アリ」云々は全体的に見て、中院本・東寺執行本との近さの方を注目すべきであつた。次に、「一モミモマレタリケレハ」云々の方も、覚一本等に類似の表現が見られる。従って、この章段には、特に岡山大学本とだけ一致する表現というものはない。

6 「平家鎮西内没落事」。前稿(一)のこの章段を扱ったところで、「太上天皇を後白河上皇とするところと自軍を官兵と呼ぶところ」には混乱があつた。南都本は「官兵ニ向テ」という表現をもたない。従って、これらを根拠とする源平闘諍録・源平盛衰記との関係は撤回しなければならない。又、同じところで、南都本の「鼻ノクセハウタルニ異名ニヤ」という表現を根拠にして南都本から覚一本等の表現が生まれたと推測したこともどうだったかと思われる。覚一本は「鼻の大におはしければ」とあり、南都本とは伝承を異にする。南都本が「アカ、リ大太」「鼓ノ判官」で使われる「異名」という言葉に執着したのだと見れば、むしろ南都本の方が後出とすべきであ

ろう（南都本の表現が独自のものもそれを証するものなのかもしれない）。前稿④の三岡山大学本③で南都本との関係を示す表現として挙げたもののうち、「又ぢうをんを」云々、「すみやかに」云々の二つについては、特に岡山大学本とだけ一致するものとは言えないので省くことにする。

7 「頼朝可為征夷將軍御使事」。前稿①のこの章段を扱ったところで、「更に、家の子二人、郎等十人の説明の仕方だが、南都本は、源平盛衰記と共に、郎等の方から始める」という指摘には見落としがあった。源平盛衰記だけでなく、中院本・東寺執行本も郎等の方から始めている。

8 「平家自九國渡四國事」。前稿②で南都本の独自の内容と見た、清経と北の方の逸話や重能が内裏造営の勸賞に阿波守に成されたということは岡山大学本にもあった。両本の関係だが、前者を見ると、北の方を大納言の娘とする点等では共通するが、全く違った世界に纏められている（拙稿「岡山大学蔵小野文庫本『平家物語』巻第八に就いて」）。

9 「木曾振舞事」。前稿②で「猫間中納言接待の様を描いたところ（55～e）には以下のような独特の叙述が見られる」と述べたが、「以下」のところが説明が中途半端であり、逸話そのものも岡山大学本に一致するところが多いことを理って置きたい。

10 「木曾与瀬尾合戦事」。前稿②で南都本の特徴としたことのうち、次の点に誤りがあった。まず、兼康の「本意」が明かされる時点は

屋代本・小城本・百二十句本・東寺執行本・中院本・八坂本と一致する（岡山大学本はもつと後になっている）。次に、兼康が倉満に「竹ノ下タヨリツト走出」て組み付くところとは岡山大学本に一致する。全体的に岡山大学本と一致するところが多いが、前稿④の三岡山大学本でこの章段を扱った箇所、相違点へ・りについては本稿の七覚一本を参照されたい。

11 「幡磨國室山行家与平家合戦事」。前稿②のこの章段を扱ったところで『南海道』『山陽道』という言い方を特に出している」と指摘したが、これも岡山大学本が同じ表現をしている。又、前稿③の「同十九日法住寺殿合戦事」の最初に『餘ノ命助リ』という表現は延慶本・長門本と共通し」と指摘したが、ここは岡山大学本も変わらない。又、右の指摘に続けて、「右両系の編集本的性格が南都本の本文にある」と記したのも早計であった（源平闘諍録に近似する表現もあり、なかなか複雑である）。

12 「同十九日法住寺殿合戦事」。前稿③のこの章段を扱った所には、以下のように訂正すべき箇所が多い。まず、「平家都落ちに伴う破損を描き出すところは延慶本に最も近い」と指摘したが、これは見誤りで、特にどの本が近いとも言えない。次に、義仲軍入京後の狼藉振りを描くところは本稿の五源平盛衰記④が妥当であろう（猶、「麦田ヲ茹セテ」に近い文は知康が法皇の命を伝えた後にあり、「口ヲ空クシケレハ」の文は源平盛衰記に近いところがある）。又、義仲軍の狼藉振りについての批評の言葉から知康が使者をつとめたと

ころまでを前稿では「当道系の表現に近い」と見たが、必ずしもそうと言えないようである。猶、源平闘諍録に近いとして挙げた「異名ヲ向フ様ニ申ス」、当道系本に近いとした「キタナキ死スナ」云々は前稿(四)の三岡山大学本^今⑩に示したように、岡山大学本が最も近い。又、源平闘諍録に最も近いと見た知康の出で立ちは源平盛衰記・岡山大学本と補い合ったりしているところもあり、絶対的なものではない。

13 「廿九日朝方以下四十九人解官事」。前稿(三)のこの章段を扱ったところで、「延慶本を始め、他本はこの後に義仲の振る舞いが『平家ノ悪行』に超過したということをつけ加える」「公朝、守成が直に鎌倉まで行ったということは他本にはない」と指摘したが、前者は東寺執行本が南都本と共通し、後者は岡山大学本・中院本・東寺執行本が南都本と共通している。

(一九八八年五月二日 受理)